
ピア・サポートを考える

荒川 哲郎

なぜピアなのか。

ピア（Peer）とは、友だち、つまり「対等になれる人」また「かけがえのない人」との意味です。友だちとの関係は公園のシーソーのように、時には力の強い方に傾き、崩れそうになるが微妙なバランスを取りながら互いが楽しめます。

ピア・サポートの言葉が生まれた背景には、障がいのある人たちがいわゆる「専門家」から、長く抑圧されてきた歴史が刻み込まれています。現在も「障がいがある」との理由だけで、多数の人たちが教育、労働、生活から分けられてきた歴史が続いています。

養護学校、作業所、障がい者の生活施設、精神病院などは障がいのある人たちが自ら創り出した場ではありません。社会の倫理観に基づき、「健常者」の生産活動、そして生活の秩序を守ることを目的として創り出された特別な場です。そこは健常者に近づき、社会のシステムで自分らしさを発揮してなんらかの社会貢献が期待されます。

そのためには社会から権威づけられた専門家が大きな期待を担うことになります。それは、障がいのある人本人が望みもしない分けられた場で長く生活、教育、労働を続けさせるためです。そこで生活をしなければならない理由を社会の多数の納税者へ納得させることが重要になるからと思われます。

「障がいはなくすべき」との社会思想を背景に「専門家」は社会からの使命を荷い、役割を果たしてきました。しかし「専門家」の「障害」への価値観は障がいのある人へ大きな影響を与えます。困ることがある度に自らが「障害」を否定し、自分自身の存在を蔑むことにもつながります。さらに自身の存在すら、どうでもよくなります。「自分が見えなくなる」との言葉がありますが、「生きている自分の存在」の喪失は底知れぬ不安な状況です。

ピアへの一つのこだわりは「障害」の否定的価値観への抵抗、そして自分たちの状況を一緒に変えていく仲間との連帯の思想が根底にあります。生活を共にするピアと一緒に「障害」は否定すべきものではなく、その人の生活に流れている一つの状況であると気がつきます。さらに困っていることをひとりで抱え込むのではなく、社会を構成する人たちがなんらかのつながりをつくり、助け合う関係を創り出しながら、解決を前向きにしていることの原点であることを認識しあう機会でもあります。

リスクのある状況に身をおくこと

ピア・サポートの研修では、「友だちは強く指示しないから、自分で決める権利を確保できる。障がいだけをみるのではなく、人間として、トータルに付き合ってくれるために、本当に何をしたいのかを解ってくれる」と友だちの役割が語られます。

現実には、ピア・サポートの状況はきびしいといえます。ピア、つまり友だちも社会の考え、価値観に大きな影響を受けて、生きているからです。そして、生活を共にすれば、互いの利害関係が衝突することは避けられません。時間の奪い合い、お金の問題、プライドを傷つけあうこともあります。友だちとのつきあいは常にリスクもあるし、悩みも生まれます。しかし、それが生きている現実であり、自然なことです。このリスクは生活に付き物との認識が大切です。

障がいのある人はリスクから、最初から遠ざけられて、特別な場所に分けられている歴史があります。もちろん、リスクがある時は、信頼して頼めるピアがいてほしいのです。ピープル・ファーストの人たちが「Stand by Me (私のそばにいてほしい)」と、願うように、自分で決めたことのリスクも含めて、共に実現できる距離にピアはいてほしいと願っています。

問題はピアとの力の関係です。世間のピア・サポートのとらえかたを含め、それぞれの状況の判断などにより、互いの関係には微妙にアンバランスが生まれる場合もあります。ピアと本人の意見が食い違う時、どのような考えを基本にすえ、現実を受け止め合うかはむずかしい課題です。

「まず、私たちを信じてほしい」

この言葉は障がいのある人たちの運動のなかで生まれた言葉です。信じられることは大きな意味があります。生きていくエネルギーの源です。「私は自由に生きたい。自分の人生の大切なことは自分で決めさせてくれ」を支える自立観には「私を信じてほしい」との深い思いが込められています。

子どもの親である私は、「信じてほしい」の言葉のなかに「どんな失敗をしても、どんな惨めになっても私の人生は私のもの。それを見守ってくれ」と、突きつけられていることに気づかされます。子どもは信じられることにより、自分への信頼をもてることを実感しているのでしょうか。「失敗をさせたくない」親の気持ちと子どもの自立したい願いはせめぎあい続けます。時には親が力で子どもを抑え込むこともあります。そして、子どもを信じることでより、子どもの身の安全、自分の安心を優先します。

このような親子の力の関係から解放してくれるのが、親からの生活の自立であり、ピア・サポートではないのだろうかを期待しています。なぜならば親は背負っているものが重過ぎるから。

大切なことを決めることができない、責任もとれない状況

「おとなになっても、親から一方的に世話をされ続ける関係では、自分が望む生き方を自らの意志で決めることができない」との考えを持ち、「親の愛」からの解放を得るために、壮烈な自立への闘いがみられます。

しかしながら障がいのある人の多くの人生の選択は、幼児期は通園施設、学齢期になると養護学校、学校を卒業した後は作業所、親亡き後は施設と一直線上にワンパターン化させられている現実が圧倒的多数です。つまり親や教師などが障がいのある人の意思を汲んでいるとして、障がいのある人に代わり、生き方を決めることがみられます。その結果、障がいのある人は自分で決めたい生活の基本的な考え方や人生の大切なことに対して決定できない、責任もとれない状況が続いています。失敗をしたり、うまくいったりと、自分を信頼できる経験さえも奪われている状況があります。

そのため、自分自身の意見を持つ必然性もなくなり、無気力にさせられたりすることが多くなると思われます。

親の「障がいを否定した価値観」からの解放

「青い芝の会」の運動のリーダーであった横塚晃一は「親からの独立」との表現で、親から離れて生活をするを提起しています。親から障がいのある人が離れて生活することはどのような意味があるのだろうか。

ひとつには障がいを否定した価値観からの障がい者自身の解放、つまり親の障がいへの価値観から呪縛されつづけてきたことの解放があります。「先ず親を通して我々の上に覆いかぶさってくる常識化した差別意識と闘わなければならない」と、親の差別意識に向き合うことを彼は提起しています。

自立生活をしている人が親との関係を振り返り書いたことを紹介します。

親は卑屈になるべきではない

Aさんは学校へ通っている時を振り返り、親が先生に「迷惑をかけます」と言う度に「自分は迷惑をかけて、ごめんなさい。生きていてごめんなさい」とつなげて生きてきました。Aさんは「親は卑屈になるべきではないし、卑屈になることを許せない」と話します。

Aさんの言葉にはどのような意味があるのでしょうか。「障がいがあるために迷惑をかけている」との親のとらえかたが本人の気持ちに根づきます。そして自分自身が学校で学んでいること、さらに生きていくことさえも否定してとらえる状況が続いてしまいます。

生きていく自信や誇りをもてない。障がいのある人たちへの価値づけは社会に潜在化している障がい観と共鳴しあい本人、親に深刻な影響を与えています。

このような自分のイメージを否定的にとらえ、自分を過小評価して生きている状況を障がいのある人たちは変えようとしています。

地域で生活をするためには、どのようなことが必要なのでしょうか。

まず大切なことは、ヘルパー、ボランティアへのマネジメントが求められます。ヘルパー、ボランティアへ生活での支援をはっきりと、わかりやすく指示をすること。生活支援についての自分の考えを最初にはっきりと伝え、わかってもらえることなど…ヘルパー、ボランティアとの信頼関係が基本になります。

たとえば、夜間や深夜のトイレ、寝返りの介助などが必要な場合、一緒に泊まる介助者が必要になります。そして、買い物などをたのむ時、お金の管理を信頼してまかせられる人も現実の生活を動かすためには大切になります。

信頼関係は自立生活を継続するためには不可欠になります。人から信じられることこそ、生きていくエネルギー源です。信じられた人はパワーアップできます。

また介助の人が数少ない場合、特定の人に負担感をうみだして、関係が崩れる場合もあります。そのため福祉サービスの活用など情報を集めるノウハウ、それを選ぶことが重要です。

お金のこと、特に年金、生活保護の範囲内で予算を組んだり、うまくお金を使うこと。そしてゴミの集積のそうじなどで、近所の人たちとの日頃からのつきあいも大切と思います。

料理が苦手な男性もいます。朝はコンビニのおにぎりを買う。昼はパンを食べ、夜は宅配の弁当。外食中心の生活を送っています。酒代も含めて一日、約2,000円の生活費に「こんなに、生活費が高くなるとは思わなかった」との率直な感想を語ります。しかし彼の地域での生活は続いています。

たとえ男性であっても、お金のこと（予算）を考え、買い物を介助の人に指示し、料理の献立、味付けのしかた、後片付けの指示、ゴミの分類の指示、ゴミを出す指示までしなくてはなりません。

このような生活の大切なことが学校のカリキュラムに考えられて、地域での生活も一つの選択に入っていれば、もっと将来への自立生活の選択の希望も増えるのではと思います。単純に「料理ができなかったら、地域での自立した生活ができない」ではなく、一緒に料理をつくる人をゲットし、自分の納得のいく味つけもガッツにして、おいしく食べましょう。地域での生活は、人との助け合い。人間関係のいろいろなノウハウを学校の時から、身につけることが求められています。